

『東京ノート』の実践とその教育効果  
Using 'Tokyo Notes' (by Prof. Hirata) and its Educational Effects

野呂博子

Hiroko Noro

University of Victoria

1. はじめに

日本語を学んでいる人たち、特に日本以外の地で日本語を勉強している人たちにとって、最大の難関は日本語を聞いたり、話したりする機会が非常に限られていることです。最近ではDVDやインターネットで日本のドラマ、アニメを見たり、衛星放送で日本のテレビ番組を視聴することも可能です。たしかに日本ドラマ、アニメ愛好者は語彙も日常表現も豊かです。私の学生にも数人、そのような人がいます。ただ、この人たちの話し言葉はまるでアニメのセリフのようで、「鈴木君、やめたまえ。」などふつう若い人たちが使わないような表現を使うこともあります。テレビドラマやアニメのセリフはふつうの人が話す日本語とは少し違い、おおげさに表現されることが多いことに気付かず日本人はアニメ・ドラマの登場人物のように話すという思い込みからそのように話すのでしょう。日本語の音に接するという点ではドラマ、アニメの視聴は非常に有益ですが、これらの表現をお手本にしてコミュニケーションをするには少し問題があります。

日本語母語話者のおしゃべりを録音して、それを真似るのがいい方法ともいえません。なぜなら、ふつうの人のおしゃべりには「うーん、それでね、なんだったっけ？」など余計な雑音が入りすぎていることが多いです。話題があちこちに飛んでしまって、初、中級程度の日本語学習者にとって、話についていくだけでも大変な負担となります。日本語学習者にとっての自然な日本語コミュニケーションのモデルを探るまえに、まず自然な日本語コミュニケーションのエッセンスはなんなのか、考える必要があると思います。このことに関しては後述します。

私はこの発表で平田オリザさんの戯曲作品であり、それが平田さん主宰の劇団、青年団によって上演された公演ビデオになっている「東京ノート」を私のクラスでどのように使って、どんな効果があったかということをお話させていただきます。

2. 「東京ノート」とは？

先ほど申しましたように、「東京ノート」というのは平田さんの作品です。あとで上演ビデオを一部お見せしますが、戯曲、演出、演技を通じて平田さんの提唱した「現代口語演劇理論」に基づいています。この理論については平田さん自身がいらっしゃるので、後で詳しく話されると思いますが、「東京ノー

ト」は芝居がかっていなくてとても日常的な会話で成り立っています。俳優がセリフを述べるといふ従来の演劇の感じからは程遠くて、セリフが重なったり、とても短かったり、会話をさえぎったり、相槌が入ったりしています。しかし、私たちの日常を振り返ってみると、普通の会話ではこういうことが起こっています。今までの演劇では、最初に書いた言葉の方が先にあって、それをいかにかうまく表現するかが俳優の技術とされてきました。しかし日本語の特徴は、助詞や助動詞によって会話することです。「～だよな」とか「～じゃない」など。主語よりも助詞や助動詞によって相手との関係、相手が目上だとか男性だとか女性だとかわかります。そして、普通は「～ですよ。」と投げかけたら、いったん呼吸して次のことばを話します。日本語の特徴に基づいて、人間の生理に基づいたセリフを書くというのが、平田さんの方法論です。

### 3. 東京ノートとの出会い

なぜ「東京ノート」を教材にしているのかは大きくわけて3つの理由があります。第一に、戯曲「東京ノート」が先ほどのべたように日本語の特徴に基づき、さらに人間の生理に基づいたセリフから成り立っています。第二に、お芝居「東京ノート」は、ふつう私たちが行っているコミュニケーション活動を基本にした演技、演出から成り立っています。第三に、日本の、また日本人のお芝居だけれど、日本、日本人をこえて、現代人として共感できる部分が多いという点です。単に日本対北米、日本対中国、韓国などと比較をするのではなく、同じ現代社会に属する者として、学習者の文化・言語背景を超えて、なにか普遍的なリアリティーを感じられると言えます。以上の理由から、自然な話し言葉のモデルとして「東京ノート」を活用しています。

「東京ノート」上演ビデオの一部をご覧ください。お見せするのはお芝居の冒頭部分です。場面は東京のとある美術館のロビー。ヨーロッパで勃発した戦争のためにヨーロッパの美術館の名画がこの美術館に避難してきているという想定です。

登場人物は由美（義姉）と好恵（義妹）の二人の女性です。1年に一回、地方に住む由美が東京に住む兄弟たちと会うために東京に出てきます。今年はこの美術館内のレストランで兄弟一同が会食をすることになっています。由美の弟、祐二の妻である好恵は美術館に来る前に由美と会い、一緒に美術館にやってきました。義理の姉妹である二人はふだん行き来があまりないこともあって、話ははずまずややぎこちない雰囲気です。

この部分から観察される言葉、また非言語的要素の特徴は以下のようなものです。

セリフとセリフがオーバーラップする。

あいづちをよく打つ。

語順が倒置する。

話題がよく移る。  
視線をあまり交わさない。  
つねに微笑みを絶やさない。  
間が長い。

以上の特徴は劇全体を通して見られます。

#### 4. 東京ノート教材に：教育上の工夫

90分の芝居ですので、そのまま上演ビデオを教材として使うには問題がありました。音声やイントネーション、間の置き方などにも注意を払ってほしいので、ビデオ上の音声では不十分です。また、聞き取り、内容理解のためにも、工夫が必要でした。そこで、俳優のセリフを音声、文字で何回でも聞いて、見られるようにCD-Romを作成しようと考えました。平田さん、青年団、紀伊国屋書店から日本語教材開発のために自由にビデオ、脚本を使わせてもらえることになりました。友人にプログラミングを担当してもらい、何とか試作品を教室で使ったのが、2001年の秋でした。同時多発の会話がたくさん入っているため、すべてのシーンを教材にするのは技術的にも無理でした。同時多発会話の音声を分けるのは難しかったので、主役の二人（由美、好恵）を中心にした16のエピソードを教材としました。内容理解に関する課題を仕上げるために各学生にCD-Romを一部ずつ貸与しました。この課題の中ですぐ答えられるもの、自分で調べないと答えられないもの、また意見を聞くものの3種類の質問とその週に扱ったエピソードのあらすじを書かせました。このCD-Rom教材は学生各自が教室外で使うことを意図して作成されたため、教室内ではほとんど使用しませんでした。教室以外での負担がかなり多いことから、やる気のある学生だけが残り、教師としてはとても楽しいクラスになりました。内容理解以外にも、毎週グループによるスキット発表が課せられました。またオンライン上の教育ツールを使って、自分の感想をアップさせています。教室活動の中心となったのが、スキット作成・発表の準備でした。

#### 5. 東京ノート教材に：教育上の工夫その1

なぜ「東京ノート」を教材にしたかとお話しましたが、その前に私が担当する上級聴解、会話のクラスで何を達成しようと考えていたのかについて、説明する必要があります。まず学生に大きくわけて5つ目標(目的)を課しました。目標1：聞き取り能力を伸ばす。目標2：音声・韻律・パラ言語能力を伸ばす。目標3：内容理解。目標4：コミュニケーション能力を伸ばす。目標5：自分を振り返る。

ここでは第一から第三の目標について述べます。

目標1の聞き取り能力というのは聴解というより、いわゆるヒアリング能力を意味しています。長音と短音の違い、促音、撥音など細かい音の特徴が正確に

聞きとれているか、ということです。聞き取れないと発音がなかなかできないというのは本当であると、このクラスを長年担当して実感しています。目標2はいわゆる発音、イントネーション、話すスピード、間などが非常に大切な役割をはたしていることを自覚させ、「東京ノート」に出演している俳優の演技（セリフの言い方）を真似することにより、その能力を獲得することを目指しています。目標3は目標1, 2とも関連していますが、登場人物の意図、感情、人間関係などはセリフがどのように話されるかによって理解できるという点に注意を払わせること、またいろいろな日常で使われる慣用表現（一応、なんか、だって等）が文脈によってどのような使われ方をしているかに注目させること、に焦点を置いています。

以上の目標達成を促進するために教育上二つの工夫がありました。その一つが前述したCD-Rom教材の開発です。このCD-Romには青年団による「東京ノート」上演ビデオが含まれているので、お芝居の全体像を観ることができます。

90分のお芝居の中から、約60分間分を16の部分に分けました。音声やイントネーション、間の置き方などにも注意を払ってほしいので、「東京ノート」上演ビデオとは別の聞き取り、発音練習用プログラムを作成しました。別画面で俳優のセリフを音声、文字で何回でも聞いて、見られるようになっています。その際に対応する英訳を読むことができます。英訳機能以外にも、せりふの文字部分をマウスでハイライトすることによって、分からないことばを辞書で検索することもできます。また、音声を何回も繰り返して聞いたり、俳優の話すせりふの後について、学習者自身も発声し、その音声を録音することができます。もう一つの工夫はオンライン教育ツールを使っての内容理解の課題提出です。

## 6. 東京ノートを教材に：教育上の工夫その2

第四の目標であるコミュニケーション能力を伸ばすには目標1-3との連携がなければ不可能ですが、いいモデルに接した結果を応用するという目的でスキット作成、発表を大体毎週行います。

スキットのテーマはその週で焦点となったコミュニケーション上のストラテジー、たとえば一週目はよく知らないもの同士がきまずさをさけるため、共通の話題を探す、そしてあいづちをうつ、かつ発話と発話をオーバーラップさせることなど、条件を与え、それ以外は学生の自由にさせました。その他、最近、「東京ノート」のセリフをそのまま覚えて、発表するという試みも行っています。この活動を通じて発音、イントネーションに問題のあった人たちが集中して練習することができました。たった1週間の集中練習で発音がよくなる学生もいました。

## 7. 東京ノートを教材に：教育上の工夫その3

目標5は異文化間コミュニケーション、また外国語教育の究極的な目的である世界と自分のつながり、自己の振り返り、気づきに関係しています。いろいろな学習活動をおこなっていても、それが無自覚に行われるのではなく、時折自分のしていることを振り返り、分析することによって学習の効果は一過性のものにならず定着するのではないのでしょうか。また何ができるようになって、まだ何ができないか、自分の中の変化などに気付くことは自信を持つことにもつながります。オンライン教育ツールで自分の思っていること、感じていることを書いてもらうことによって、もやもやしていた思いが形になります。また文章を書く練習にもなり、また自分の書いたものを他の人に読んでもらうということで、書く際にも間違いがないように、注意をはらうようになったようです。

## 8. 東京ノートを教材に：教育的効果

目標をいろいろ掲げましたが、すべての学生が目標の全部を達成したわけではありません。また、目標の達成を測る評価方法もまだ確立していないので、主観的な印象にとどまっていますが、多くの学生の聞き取り能力が伸びたように思えます。またその他の目標に関しては、達成したというより、日本語でコミュニケーションをするということは今まで考えていたのとはちがって、狭い意味でのことば以外の要素が大変重要な役割をはたしているということに気づきはじめたようです。この講座を取った後、日本に初めて長期滞在をした学生が「東京ノート」で勉強したことで日本でのコミュニケーションに対してとまどいをそれほど感じなかったという報告をしています。

また一番の教育効果は話す自信が生まれたこと、そしてクラスの中で連帯感が生まれたということでしょう。オンライン教育ツールに掲載された学生のコメントはクラス内の連帯と話す自信についてふれています。過去にあがり症の学生が最終的に自信をもって人前で話せるようになったという例もあります。

## 9. 今後の課題

第一に学習効果を測るにはまずコミュニケーション能力の測定方法を検討する必要があります。将来はOPIなどの口語コミュニケーション評価方法を参考に学習者の能力を測定していきたいと思っております。

第二には従来考えられてきたコミュニケーションイコール情報伝達という概念を再検討していきたいと思っております。

「コミュニケーション」というとまず何か言いたいことがあって、それを相手に伝達するという図式を思い浮かべがちです。たしかにはっきりとした意図がまずあってそれを相手に伝える状況も多々あります。仕事場で企画案をプレ

ゼンする場合など、明確な目的、伝えたい内容がまずあって、それらの情報を効果的に聞き手に伝えようと最大限の努力をするでしょう。この場合の目的は聞き手を説得することにあります。しかし、私たちの日常生活を振り返ると相手とコミュニケーションを取ることでそのものが、目的になる場合の方が多いのではないのでしょうか。気の合う友人とのおしゃべり、近所の人にばったり会った時に交わす会話などはそのよい例です。最近、特に若い世代の間では、携帯電話、パソコンでのメール、チャットの書き言葉によるやりとりが話し言葉によるやりとりの代わりをしているようですが、メールの書き言葉は話し言葉を模しているように思えます。その意味では、これも話し言葉による自己目的のコミュニケーションの変種と考えられるでしょう。自己目的のコミュニケーションの一つのかたちである雑談を例に、母語話者はどんなことをしているのか探ってみましょう。豊橋技術大学で教えていらっしゃる岡田美智男さんは「自分が本当に伝えたいことは会話の中で生まれてくる、あるいは結果として会話の目的のようなものが立ち現われてくる。会話そのものが目的だったりもする。」と述べています。コミュニケーションには「伝えたい、伝えようとして伝わること」と「結果として伝わってしまうこと」の二面性があるようです。従来のコミュニケーション観では前者の「伝えようとして伝わる」面が重要視されて、後者の「結果として伝わる」という面が軽視されていたようです。従来、見逃されがちであったコミュニケーションの側面は、言い換えるとコミュニケーションを人と人とのつながり、つまり関係性に焦点をおいています。対話をしている人たちは独立した主体が交互に情報をやりとりしているのではなく、むしろお互いの間の境界線があいまいになって、共同のシステムを作っています。この場合のシステムは固定したものではなく、リズムがあり流動的です。ジャズなどのジャムセッションを想像していただくとわかりやすいと思います。それぞれの楽器が奏でる音楽同士が一緒になってハーモニー、リズムを作っていきます。普通、ジャムセッションは即興で行われますが、演奏家一人一人がいくら上手でもそこにシステムがうまれないとただの雑音の寄せ集めになってしまいます。演奏家の奏でる音楽の間に関係性がジャムセッションの命ということでしょう。ジャムセッションのようなことを可能にするのは一体なんなののでしょうか。仲間の演奏者にただ合わせてついていくのではなく、(それだとテンポが遅れてしまう)、自分の「身体」を他者の「身体」と融合させるといえることを無意識にしているようです。この融合を「相互のなり込み」と呼んでいます。

対話をしている二人は、二つの主体がばらばらな状態で交互に言葉をテニスボールのようにやりとりしているのではなく、むしろ二つの身体がお互いの身体になり、入れ込みあって、一つの流れ(システムといってもよいですが)を作っています。このような状態を「間身体的な場」と現象学では呼んでいます。日常の雑談も「なり込みの場」を介して他者との関係性が築かれ、調整されて

います。たとえば、昨日みたテレビ番組、学校で起きた事件などを友人同士で再構成する「共同想起会話」では、同じような発話が同時に出現することがあります。二つの身体が一つの発話を作るのを楽しんでいるようにみえます。他にも一つの文を二人で完成させる、相手の言葉が終らないうちに自分の言葉をかぶせるなど、「相互のなり込み」は日常、私たちがよくしていることです。言葉を介さなくとも、一緒にごはんを食べたり、テレビを見たりすることで、相手の考えている、気持ちがなんとなくわかることがあります。一緒に何かを見るという共同で同じことがらに注意を向けるという過程でお互いの気持ちが通じ合ったような気になるということです。

話し言葉としての日本語、とくに会話指導の際に以上のような関係性、間身体性の視点に注意をはらった指導法を取り入れるという点で「東京ノート」をはじめ、演劇は非常に効果があると思います。

#### 参考文献

平田オリザ (1995) 『東京ノート・S 高原から』 晩聲社

平田オリザ (1998a.) 『演劇入門』 講談社

平田オリザ (1998b.) 『東京ノート (上演ビデオ) 』 紀伊国屋書店.

川口義一 (2005) 「日本語教科書における「会話」とは何か—ある「本文会話」批判—」 『早稲田大学日本語教育研究』 第六号

岡田美智男 (1997) 「コミュニケーション～雑談～における構成的な理解にむけて」、サマーフォーラム記念講演原稿。

岡田美智男 (2001) 「社会的相互行為における不安定さについて」、人口知能学会誌 特集 「社会的相互行為」、Vol. 16, No. 6.

Schewe, M. and Shaw, P. (eds.) (1993) *Towards drama as a method in the foreign language classroom.* Frankfurt: Peter Lang Verlag.